修士論文(要旨)
2013 年 7 月

初級から始める Can-do statements

―構造シラバスからの工夫―

指導　齋藤　伸子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
211J3902
須藤　千陽

目次

第１章　序章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1-1　背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1-2　研究の目的と意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２章　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2-1　CEFR と日本語スタンダード・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2-2　複言語能力と社会的視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
2-3　『みんなの日本語』を使った授業実践報告・・・・・・・・・・・・・・・8
2-4　Can-do statements を取り入れた日本語教育・・・・・・・・・・・・・ ・9
第３章　授業実践研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
3-1　調査の流れと目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
3-2　各課の進め方と活動内容の改定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第４章　予備調査の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
4-1、4－2　予備調査の目的と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
4-3　予備調査の考察と改善点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
4-4　改定後の教師のインタビュー調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第５章　本調査 1・2 の内容・・・・・・・・　・・・・・・・・・・・・・18
5-1、5-2、5-3　本調査１・2 の目的と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
5-4、5-5　母語話者による半構造化インタビューの概要と分析・・・・・・・・・・24
第６章　本調査 3 の内容・・・・・・・・・　・・・・・・・・・・・・・・26
6-1、6-2　本調査 3 の目的と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
6-3、6-4　母語話者による半構造化インタビューの概要と分析・・・・・・・・・・29
第７章　Can-do statements を取り入れたコースデザイン・・・・・・・・32
7-1　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
7-2　コースの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
7-3　授業の進め方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
7-4　『みんなの日本語』第 3 課のシラバス・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
7-5　『みんなの日本語』第 11 課のシラバス・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第８章　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
8-1　日本語学校・コース設計者の視点から・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
8-2　教師の視点から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
8-3　学習者の視点から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
8-4　進学先・就職先の視点から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第９章　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
参考文献
資料

第１章　序章

グローバル化が進み、国境を越えて移動する日本語学習者が急増し、多方向的な日本語学習者の移動は、今後一層活発になることが予想される。コミュニケーションを重視した言語教育・学習の需要が高まり、「個別性、多様性」に対応したコースデザインの必要性が叫ばれている中、国内の多くの日本語学校では構造シラバスの枠組みから逃れられないでいる。日本語学校の従来の変わらない教授法は多様化する学習者の動向に合わせられていないのではないか。現在、多くの日本語学校が抱える授業運営上の３つの問題点は、１）使用教材と指導方法、２）評価、３）行動中心に考える Can-do statement s （以下、Cds）を取り入れたコースデザインの必要性である。3 つの問題点を理解した上で、学習者の教室外の言語行動を視野に入れ、学習者の現実性を保持した学習活動を教室で行う必要があると考える。授業の運営を担う立場として日本語学校の抱える制約の中で学習者の個別性に対応した行動中心に考える Cds を取り入れたコースデザインを、実践研究をもとに提案したい。

第２章　先行研究

2001 年欧州評議会は Common European Framework of Reference (以下 CEFR) を発表し、「実際の言語使用場面で何ができるか（Can-do)」を記述した 493 の例示的能力記述文（以下 CEFR Can-do) を提供した。日本語教育の中でも CEFR Can-do をもとに「JF スタンダード 2010」を発表した。『みんなの日本語』を使った実践研究は岩澤・三矢（2009)、鈴木(2010)が挙げられる。Cds を取り入れたコースデザインについては山本（2008）が国内日本語学校で Cds に沿った内容と自己評価を実施している。義永(2009)は第二言語習得研究における認知的視点と社会的視点を比較し、社会的視点で第二言語使用者の「複言語能力」(multicompetencies）を認め、具体的な状況の中で利用可能なリソースを駆使しながら、相互行為を達成させいている事実を重視している。大平（2010）は複言語・複文化主義（plurilingiusme/pluriculturel）の概念は、個々人の言語経験や日常生活に光をあてるものとしている。

第３章　授業実践研究内容

本研究は稿者が勤務する W 日本語学校の現場と協力し、担当する初級クラスの授業で授業実践を行った。各課の進め方を文型定着を目的としたものではなく、コミュニケーション活動を重視したアプローチに改定した。Cds による目標を意識し、各文型の使用場面が想定しやすい導入と練習で授業を進めることとした。調査は『みんなの日本語』第 3 課と 11 課において実施し、それぞれ「買い物ができる」「注文ができる」という学習目標を設定し、学習者の教室外での言語行動を把握するため、宿題として既習文型が実際の使用場面で使えたか、何が足りないかを自己評価する「内省レポート」を後日提出することとした。

第４章　予備調査の内容

学習者の Cds の認識と教室外での言語行動を観察することと、宿題として出した内省レポートの妥当性を検証するため予備調査を実施した。

第５章　本調査１・２の内容

予備調査で得た結果をもとに教室内活動の内容と内省レポートに改善を加え、本調査 1・2 を実施した。調査の目的は学習者個人の言語行動がイメージしやすい教室内活動を取り入れ、

学習者の言語行動目標の個別化と具体化を図ること、学習者の実際の使用場面の自己評価について観察することを目的とする。内省レポートとインタビュー調査の結果、１）教室内と教室外活動おいて聞く能力と読む能力に大きなレベル差がある。２）指差しや食券で注文する学習者の背景には自らの日本語力への自信の無さから日本人との接触場面を避けたり、制限をかけていることがある。３）多くの学習者が教科書と実社会での使用言語との違いに「気づき」、日常生活ですぐに役に立つ実用会話の学習を望んでいる。４）従来の文型定着型の構造的シラバスの学習による新たな発見と、教科書と並行して学習したいという学習者の声が考察できた。

第 6 章　本調査 3 の内容

本調査 3 では学習者の言語行動目標をより具体化するため、教室内で実践のための準備の時間を設け、使用場面、言語行動目標を自ら設定することとした。その教室内活動が教室外の実践に与える影響、また教科書と実際の実質行動で使用される言語との差を埋めるためのストラテジーを調査する。内省レポートとインタビュー調査によって以下のことが推察できた。１）学習者が求めている言語能力が複雑な過程であり、言語目標行動の個別化により、さらに学習者の教室外の言語行動目標を具体的に考察することができた。２）社会的文脈の中で自分自身の言語行動を観察し、具体化した課題を設定し、補償ストラテジー、社会ストラテジーなど相互的にストラテジーを取り入れ、試行錯誤を繰り返しながらその目標を達成している。

第 7 章　Can-do statements を取り入れたコースデザイン

日本語学校の変えられない制約の中で社会的視点で学習者の個別性・具体性を視野に入れたコースデザインを提案したい。本研究が対象とするコースは初級前期（CEFR A1A2）レベルを想定し、初級ⅠとⅡを週 20 時間×6 か月、計 400 時間で修了する。全体的な目標は CEFR 共通参照レベルの全体的な尺度を採用した。ここでは本研究の調査で行った『みんなの日本語』の第 3 課と第 11 課の授業計画を考案する。文型シラバスの授業の骨組みである文型や語彙を体系的に蓄積していくこと、教科書のマニュアルにある進め方は基本的に変えずに汎用性のある枠組みを設定した。語彙や表現の学習する順番は「易」から「難」に囚われず、学習者の学習目標に合わせ積極的に発展練習で取り入れていくこと、練習で使われる使用場面も教科書に提示してある場面に限らず、学習者の言語行動を観察し、柔軟性に対応していくこととした。

第 8 章　考察

本章は４者の視点からの構成となる。１）日本語学校・コース設計者の視点：日本語学校の変えられない制約の中で学習者の社会的視点を視野に入れたカリキュラムの見直しは責務である、2）教師の視点：教科書の構造や文型に囚われることなく学習者や自分自身の言語行動を観察し、従来のアプローチを変える視点が必要である、３）学習者の視点：教室外の社会とのつながりを促す活動は、学習者に教室外に視野を向けさせる動機とメタ認知スキルを高める可能性が推察できる、４）進学先・就職先の視点：評価について「自己評価」「ポートフォリオ」の活用は外国人との共生社会を円滑に実現させていくために有効な手段となる、と述べている。

第 9 章　今後の課題

今後の課題として日本語教育における評価と、日本語教育の複言語・複文化主義の展望について述べている。

参考文献

上野田鶴子（1988）「日本語学習者の多様化」『日本語教育』66 号 pp. 1－13

岡本佐智子（2010）「「ヨーロッパ共通参照枠」と日本語教育における社会言語能力」『北海道文教大学論集』11 号 pp. 85－98

岡崎友愛・古川嘉子・三原龍志(2011)「評価基準と評価シートによる高等発表の評価－JF 日本語教育スタンダードを利用して」『日本語教育紀要』第 7 号 pp. 119-133

来嶋洋美・柴原智代・八田直美(2012)「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『日本語教育紀要』　第 8 号 pp. 103-117

佐々木倫子・鈴木理子（2009）「自立した言語使用者が育つ地域日本語教育－就労を目指す日系人を例に－」『桜美林言語教育論叢』 第 6 号 pp. 1-16

佐々木倫子・細川英雄・砂川裕一・川上郁雄・門倉正美・牡川波都季（編）（2007）『変貌する言語教育－多言語・多文化社会のリテラシーズとは何か－』くろしお出版

品田潤子(2012)「日本語のコミュニケーションの方法」『コミュニケーションのための日本語教育研究予稿集』pp. 41－46

島田めぐみ、三枝令子、野口裕之（2006）「日本語Can-do-statementsを利用した言語行動記述の試み－日本語能力試験受験者を対象として－」『世界の日本語教育』第16号pp. 75-88

鈴木裕子（2010）「「みんなの日本語」を使った CEFR 授業実践報告－既存の教科書を使っての CEFR の試み－」『ヨーロッパの日本語教育の現状－CEFR に基づいた日本語教育実践と JF 日本語教育スタンダード活用の可能性－』pp. 124-133

トムソン木下千尋(2008)『海外の日本語教育の現場における評価－自己評価の活用と学習者主導型評価の提案－』日本語教育 136 号

Ｊ．Ｖネウストプニー（1982）『外国人とのコミュニケーション』岩波書店

Ｊ．Ｖネウストプニー（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店

細川英雄・西山教行　編（2010）『複言語・複文化主義とは何か－ヨーロッパに理念・状況から日本における受容・文脈化へ－』くろしお出版

宮副ウォン裕子（2004）「教室内と教室外の活動をどう結ぶか　－香港の経験から－」『2004 年日本語教育国際研究大会予稿集 本冊』 pp. 10-15

山本弘子（2008）「日本語学校から見た評価の観点の見直し--ヨーロッパ共通参照枠の視点から 」（特集） 教育現場から問い直す『評価』『日本語教育』pp. 38-48

吉島茂(訳・編)『外国語教育Ⅱ　外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages:Learning, teaching assessment』朝日出版社

義永美央子(2009)「第二言語習得研究における社会的視点－認知的視点との比較と今後の展望－」『社会言語科学第 12』巻第 1 号 pp. 15-29

参考URL　(2013年7月30日最終参照)

(1)岩澤和宏・三矢真由美(2009)「CEFR の共通参レベルと Can-do で初級シラバスを見直す」〈http://jfstandard.jp/information/attachements/000112/jirei_01.pdf